居住環境と村づくりのあり方に関する研究

—秋田県東成瀬村における全戸アンケート調査—

泉　澄佳・長谷川　武司

Rural Development under Consideration of local residents' Opinion, of Their Living Environments

Sumika IZUMI, Takeshi HASEGAWA

(1999年11月30日受理)

It is important to solve problems of population decrease and production fall in the cold and snowy area of Northeastern Japan. We proposed that residents assume responsibility for the region's future, and for the local government to consider a policy that clearly recognizes their opinions and hopes. To this end, a questionnaire survey was performed at Higashinaruse village in the autumn of 1998. This report summarizes the survey and discusses our proposals.

1．はじめに

1．1　研究の目的

東北地方などにおける積雪寒冷地における農山村では，恒常的に人口減少傾向にあり，多くの自治体がその解決に取り組んでいる。その取り組み方として，従来の行政主体の地域計画，施行に対する反省から，住民の意見を取り入れた手法によるまちづくり・むらづくりが行われている。地域にすむ住民が計画決定に責任を負い，地域づくりに重要な関わりをもつという方法である。この方式の場合，地域住民が居住地域の現状や将来についてどのような意識を有するのか，もっともベーシックなところで自己の住まいや周辺環境を通して抱いている考えを丁寧に調べていく作業を必要としている。このような観点から本研究では，積雪寒冷地における農山村の抱える地理的条件をふまえた地域づくりのあり方，また地域づくりの原点である住民の基本的生活空間の安全性，快適性を重要視する。

本稿では，1998年９～10月に実施したアンケート調査結果より，住民の意識からみた居住環境の現状を報告し，居住環境の整備内容と村づくりへの展望を考察する。

1．2　調査対象地の地域特性

調査対象地秋田県東成瀬村は県南東部に位置し，村の中央を流れる成瀬川に沿って僅かな平地があるほかは山地となっており，県内有数の豪雪地帯となっている[3)]。

村内の地域を大字ごとに概説する。各地域の位置は，隣町の増田町よりアプローチしたところから最も手前にあるのは「田子内」，田子内よりさらに東方に向かって村の内部へ進み，成瀬川が大きく曲がるところに位置しているのは「岩井川」，岩井川より南方の縦長に広がる地域が「椿川」である。

田子内には村役場，村の先人の生活を紹介する民具や農具の展示をしているふる里館，仙人の里としての象徴である仙人像などの施設があり，村の玄関，中枢としての位置付けができる。田子内にある集落内での世帯数は44～89であり，住宅間の距離は短く，隣家と隣家が接するような状態で立地している。

岩井川には，宿泊施設，ジュネス栗駒スキー場な

どのレジャー施設がある。また，生涯学習活動の場として中心的役割を果たす岩井川コミュニティセンターがある。北方に山内村，東方に岩手県胆沢町へと抜ける道路がある。集落内の世帯数は51～72であり，数件ずつ寄り集まって集落が形成されているところが多い。

椿川には，大柳自然公園，須川湖周辺のレジャー施設がある。成瀬川に沿って点在する住宅に対して迫るような豊富な緑に囲まれた地域である。集落内の世帯数は７～69であり，他の地域と比べて集落ごとの距離があり，また集落内においても隣家との距離が離れているところがある。

２．調査概要

アンケート調査は秋田県東成瀬村全世帯主を対象とした。調査時期は積雪前の９月から10月にかけて設定し，配布は行政協力員によって1998年９月20日，回収は直接訪問回収を1998年10月３～５日に行った。回収日に回収できなかった分については後日郵送回収とした。配布数894，回収数454，回収率は50.8％である。

３．調査結果

居住環境に関する現状と村づくりへの展望に関わる設問項目について，次のようにみていく。

居住環境に関する現状については，寒冷地の生活上欠かせない暖房・断熱措置などの寒さに対する設備の設置状況やその他の住宅設備，住宅のメンテナンスなどから，住宅内における居住環境の現状をみる。道路の安全性や公的施設の利用のしやすさなどから，屋外空間における快適性の現状を探る。また，消費生活，福祉，コミュニティなどの状況も含めて，生活環境を全般的に概観していく。

村づくりへの展望についてかかわる項目として，はじめに居住意識より村に居住する要因を探り，次に村の施設に対する愛着や認知の様子から，住民が関心を示すものなどをみていく。そして，活性化に役立つことやそのために必要なこととして提案されたことより村づくりに活かせる具体的な方向性を見出していく。

３．１　回答者の属性

表１に年齢，性別，職業，勤務形態，職場を示した。

表１　回答者の属性（人数）

1.性別

男	女	無回答
384(84%)	53(12%)	17(4%)

2.年齢

20～29	30～39	40～49	50～59
3	24	100	99
60～69	70～79	80～	無回答
117	81	14	16

3.職業

農業	農業と兼業	林業	漁業
171	9	12	0
鉱業	工業	建設業	販売業
1	46	6	25
サービス業	事務職	医療関係	保安関係
13	23	1	6
主婦（無職）	主婦（パートタイマー）		無職
10	11		66
その他	無回答		
2	52		

4.勤務形態

自営業	勤め人	家族従業者	その他
84	166	16	20
自営業，勤め人		無回答	
4		164	

5.職場

村内	村外	村内、外	無回答
213	93	3	145

３．２　居住環境に関する結果

1)　住宅のメンテナンス，設備

基本的生活空間の中でもっとも身近な空間といえる住宅のメンテナンスを定期的に行えている家庭は約半数近く（47％）ある。地域ごとの大きな差はみられない（図１）。

トイレ形態は，大半の家庭が汲み取り式である（78％）。地域ごとにみると岩井川において，簡易水洗式を設けている家庭が20％弱であり，他の地域に比べ，若干ではあるが新しい設備のある住宅，あるいは住宅そのものが新しいものが多いと予想される（図２）。

寒さに対する設備について，年齢ごとの大きな差はない。特徴の見られた次の点について述べる。

寒さに対する住宅設備と地域（大字）の関係について（表２），給湯システムの設置状況はどの地域においても台所，浴室に給湯システムを設置している家庭が半数程度である。椿川においては他の地域に比べ，洗面脱衣所の給湯システム設置率が10％弱低い。

ストーブ類の設置率は，居間の設置率に田子内と椿川で11％の差があるほかは，各部屋とも地域ごとに大きく差がみられない。ストーブ類のなかでは，

表 2　寒さに対する住宅設備

部屋	対策(設備・器具)名	設置率(%)	田子内	岩井川	椿川
トイレ	暖房便座	22%	21%	20%	16%
	床暖房	1%	1%	1%	0%
洗面脱衣所	給湯システム	45%	46%	47%	38%
	床暖房	3%	2%	2%	2%
浴室	給湯システム	57%	57%	56%	50%
	床暖房	5%	5%	5%	2%
	複層ガラス	19%	21%	18%	14%
台所	給湯システム	55%	55%	55%	46%
	床暖房	3%	5%	2%	2%
	ホットカーペット	8%	10%	7%	9%
	足元温風ヒーター	1%	2%	2%	0%
	ストーブ類	74%	73%	68%	76%
主寝室	布団乾燥機	31%	35%	37%	18%
	電気毛布	44%	47%	33%	40%
	ホットカーペット	7%	8%	6%	4%
	床暖房	2%	1%	2%	1%
	ストーブ類	57%	56%	53%	55%
居間	こたつ	24%	27%	12%	32%
	床暖房	17%	23%	13%	13%
	ストーブ類	39%	44%	32%	33%
屋根・天井	断熱材	20%	18%	26%	17%
壁	断熱材	24%	23%	27%	19%
	複層ガラス	16%	16%	20%	9%
床下	断熱材	11%	13%	11%	9%

設置率＝設備世帯数/全世帯数×100

表 3　家のメンテナンスと住宅設備の関係

設置世帯数		家の修理や掃除などの手入れを定期的に行えているか	
部屋	対策(設備・器具)名	はい	いいえ
トイレ	暖房便座	53	39
	床暖房	3	1
洗面脱衣所	給湯システム	109	83
	床暖房	8	4
浴室	給湯システム	133	109
	床暖房	12	7
	複層ガラス	53	27
台所	給湯システム	137	96
	床暖房	7	8
	足元温風ヒーター	5	0
	ストーブ類	174	144
主寝室	布団乾燥機	85	61
	電気毛布	103	88
	床暖房	7	2
	ストーブ類	137	107
居間	床暖房	48	28
	ストーブ類	187	157
屋根・天井	断熱材	56	31
壁	断熱材	69	35
	複層ガラス	45	22
床下	断熱材	33	17

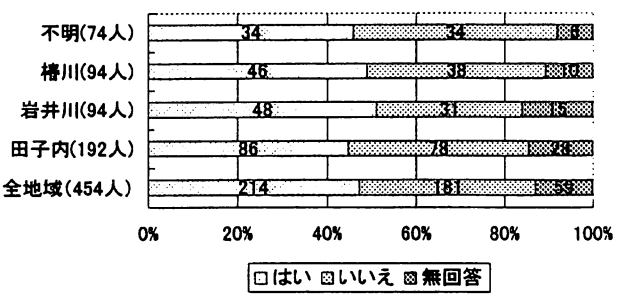

図 1　家の修理や掃除などの手入れは定期的に行えていますか

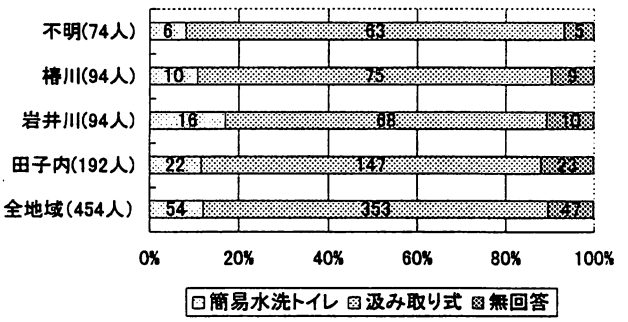

図 2　トイレ形態

薪ストーブの設置率が高いのは，椿川であり（台所：田子内５％岩井川16％椿川26％，主寝室：田子内２％岩井川４％椿川７％，居間：田子内10％岩井川21％椿川29％）この地域においては古い住宅のある割合が高いとみられる（表２）。

寒さに対する住宅設備の状況とメンテナンスとの関係については，掃除や修繕などの住宅のメンテナンスが定期的に行えている家庭は，そうでない家庭と比較して，寒さに対する住宅設備の設置率が高い傾向がある。（表３）床暖房や断熱材，複層ガラスなど建築時，あるいは改築時に設置するものについて割合が高く，また，寝室における寝具の暖房器具である布団乾燥機や電気毛布等の割合も高くなっている。

2）　住宅外における生活空間について

道路の安全性について，子どもや老人でも車に脅かされず道を歩けると思う人は15％であり，65％の人が危険だと感じているようである（図３）。

センターや集会所の利用のしやすさについては，村全体では半数以上が使いやすいと感じている（図４）。運動施設の利用に関しても利用しにくいと感じる人の割合が少ない（図５）。なかでも，コミュニティセンターが存在する岩井川では利用しやすいと回答した人の割合が高い。

3）　消　　費

生活に必要な食品や衣類を購入するため生活に必要不可欠な施設として店があるが，自宅近くに品揃えの豊富な店があるかとの問いにはいいえと回答した人が66％である（図６）。村内には大型小売店はなく雑貨や食料品を扱う小規模小売店，農作物の無人販売所が点在するほか，農協が運ぶ販売車があるのみで，物を購入する上では不便な状況である。

4）　福　　祉

福祉サービスについて，ホームヘルパーなどのサービスを受けやすいと感じている人は（図７）年齢80歳以上の人の中には半数いるが，全体的には，どちらでもないとする人が多い（37％）。65歳以上の人口千人当たりのホームヘルパー数は，13.87人と県内順位が３位であり（全国5.56人）[4]，特に利用している年齢層においてこの結果が反映されていると思われる。障害者や高齢者に対する福祉サービスが充実しているかという問いにも，どちらでもないとする人が多く（42％），福祉サービス全般について，利用

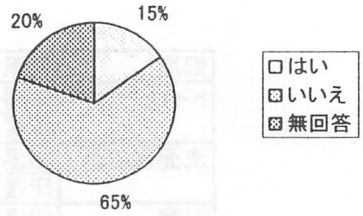

図３　子どもや老人でも車に脅かされず道を歩けますか（全地域：454人）

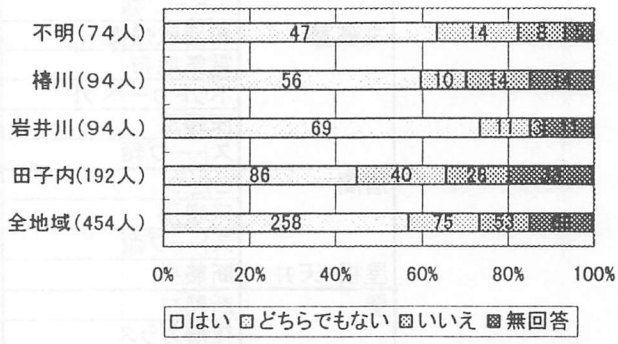

図４　村のセンターや集会所などが自由に使える

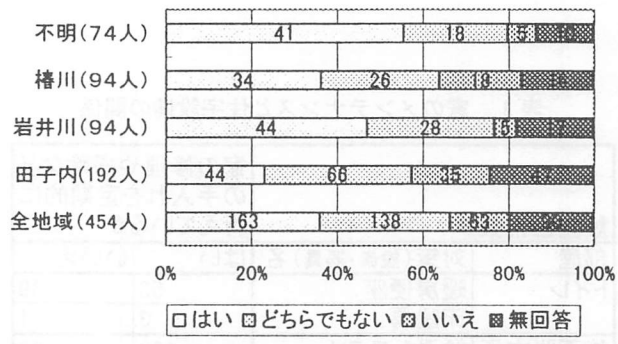

図５　公園や運動施設，グランドなどが利用しやすい

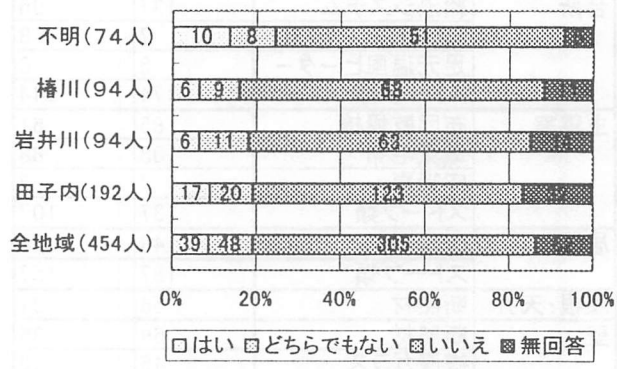

図６　品揃えの豊富な店が近くにありますか

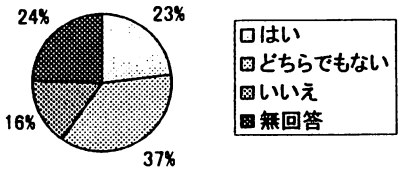

図7　ホームヘルパーなどのサービスが受けやすいですか（全地域：454人）

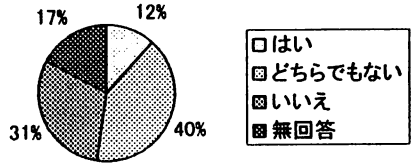

図8　自分の住んでいる地域，村をよくする運動ができる機会がある（全地域：454人）

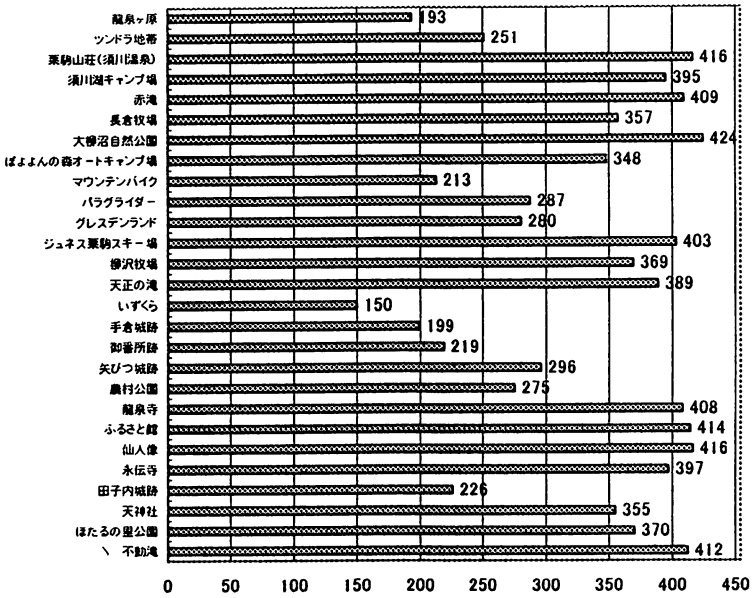

図9　知っている施設（全地域：454人）

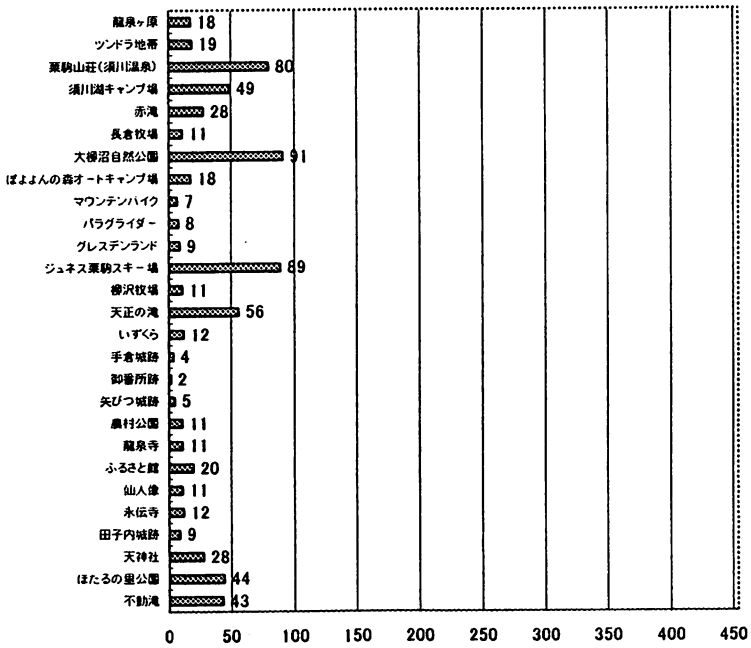

図10　好きな施設（全地域：454人）

しにくいとの切迫した状況ではないが，満足できる状況でもない様子がうかがえる。

5)　コミュニティ

コミュニティに関わる施設の利用に関しては，利用しやすい状況にあるが，村をよくする活動などが行われることや行事などへの参加に対する積極性は乏しいようである（図8）。

3．3　村づくりに対する展望

1)　居住意識について

村で生活する理由は，「家があるから（270人）」という家産的理由が最も多く，ついで「故郷だから（160人）」「静かなところだから（27人）」などの地域選択的理由が多い。また，前述の理由を示す人数とは大きく差があるが，「仕事があるから（54人）」という職業的理由，「自然豊かな環境が好きだから（42人）」「村が好きだから，誇りがあるから（24人）」という愛着的理由，「昔からの知人がいて安心できる（33人）」とう社会関係的理由を示す人もいる。「福祉サービスが充実しているから（8人）」「子育てにはよい環境だから（14人）」生活環境的理由や「楽しいイベントに参加できるから（2人）」「スキー場やキャンプ場など遊べるところがあるから（3人）」などレジャー的理由は，本調査の結果によると少ない。その他「ほかに行くところがないから」というマイナス要因を示す人は24人いるが，全体的には積極的に東成瀬村を選んだという要素は薄いものの，故郷に愛着を感じ，ふる里であるからという理由が居住意識のなかに存在する。

2)　村の施設に対する認知，愛着について

村の施設や資源などに関する認知度と愛着度について次のような結果となった（図9，10）。

村の施設は全般的によく知られているが，御番所跡，城跡などの史跡に対する認知度が低い。

好きな施設としてあげられたなかでは，スキー場や須川温泉，大柳沼自然公園など村当局が積極的に宣伝しているものを選んだ人が多い。ほたるの里公園，不動滝，天正の滝など親水空間も好まれているようである。

3)　村の活性化に役立つこと

村の活性化に役立つこととして提案された意見を分類すると以下のようになった。

雪を利用したもの	**56人**
自然学習キャンプ，星座学習など自然環境を利用したもの	**72人**
特産品市，田植えツアー等農業を基盤としたもの	**64人**
山菜採り，山菜加工・販売	**10人**
生活の安定，向上に関わるもの	**6人**
何も要らない，現存の施設利用	**25人**
その他のアイデア	**11人**

具体的な記述内容から「四季を通し自然を多くの人たちに知ってもらいたい」「村の自然をそのままにしておく」など自然環境に対して，愛着と村の財産的意識を持つ人がいることがわかる。また，村の主要産業である農業を念頭に置いた意見や，現在の施設の利用など現状を利用して安定へ向かわせるような現実性を重視した意見も示された。これらのことから，活性化に役立つことを積極的に示した人の中には，村の財産としては「自然」があり，基本的生活の運営が大切だと意識している人が存在することがわかる。

4　考　　察

今回のアンケートでは比較的単純な問にも，無回答とする人があり回収率も51％弱にとどまった。これは調査内容の分量が大きいこと，留め置き方式にしたため調査の趣旨が十分浸透できなかったことによるのかもしれない。しかし，訪問回収時に在宅していた住民の対応には積極性があり，村の活性化に大きな期待をよせていることが感じられるものであった。以下はアンケート結果及び回収時に行われた住民との対話から得られた幾つかの課題と村づくりへの展望について考察する。

4．1　生活空間における整備課題

1)　住宅内における整備課題

水回りの給湯システムの設置状況について，地域全体的に，約半数の家庭で設置されているが，設置されていない家庭も半数程度あると思われ，洗面脱衣所における床暖房や他の暖房設備は乏しく（設置率5％以下），寒冷地における生活行為に負担があるものと推察できる。また，家のメンテナンスを定期的に行えている家庭については住宅設備がよく整えられる傾向にあり，特に建築時に整備しておかねば設置に工夫を要する断熱材や床暖房，複層ガラスの

設置については定期的にメンテナンスを行えていない家庭と比較し，約2倍ほどの差がある。

住宅内事故を防止し，快適な生活環境を創造する目的から，住宅内における断熱・暖房措置を施すことが重要である。

2) 屋外空間における整備課題

道路空間については歩行者にとって危険だと感じられているようである。現地視察からも，道路幅に対して大きな車やスピードを出して走行する車がよく見られ，交通手段として歩行を主とする高齢者や弱年者にとっては，この様子は脅威を感じるものとなり得る。また，冬季には雪による行動阻害要因があり，除雪の徹底を行って歩行空間を確保し，道路幅の狭いところにおいては，車の走行速度を遅くするような措置をとるなどの工夫が必要である。

村内での生活を基本的生活とする住民にとっては，安心して，あるいは快適に生活をおくるという意味から，住宅内の環境整備を行うことは然る事ながら，身近な外部空間にも安心して行動できる環境が整備されるべきである。具体的には，道路空間の整備に始まり，買い物がし易く，近隣の人とほどよい関係で接することのできるコミュニティが存在できるような環境作りである。現在のところ，コミュニティセンターなどの利用はしやすいけれども，そこに行くまでのルートに問題があり，明確な目的が無くても立ち寄れて居易いような公的な場が存在しないようである。日常生活において快適と感じる環境や，ある程度自分や他人がいかに行動するかについて予測できる社会を求めることは普遍的なニーズであり[5]，快適な行動域を創造し，コミュニティを形成するために現在の物理的環境を改善することが求められる。

4．2 村づくりへの展望

村の施設に対する認知度より，村役場から発信される情報を住民は敏感に受け止めているようである。また日常的に情報を得るために，あるいは相談窓口などに村役場が利用されることから，村づくりへの方向付けにおいて村役場の果たす役割は大きいと予想される。住民の意見には，「住民意欲へのリーダーシップ」「まとまり」「村民教育」など，活動をする上で原動力となるものやそれを導くものに対する意見がある。住民の意見を導き出して活動を行う上では，リーダーを育成し，グループワークなどを通した住民意識の顕在化と認識付けなどの方法が有効であろう。

また，この方法の基本には日常的な住民同士の関わりが不可欠であり，地域コミュニティがいかに醸成されているかということが重要な点となるであろう。

具体的な村づくりの要素としては自然環境を保護して活かしていくことや農業を基盤としたことなどが，住民の意識から導き出せる。

参考文献

1) 泉澄佳　長谷川武司，積雪寒冷地域における居住環境と地域づくりのあり方について—秋田県東成瀬村を対象として—，日本建築学会東北支部，第62号，P 85～89，1999年
2) 東成瀬村　泉澄佳　長谷川武司，「21世紀にむけた村づくりのための調査報告書」，1999年
3) 泉澄佳　長谷川武司　春日克憲　矢嶋裕紀，秋田高専研究紀要，34，P 48，1998年
4) 秋田県企画調整部情報統計課，「わがまちわがむら100の指標」，秋田県統計協会，1997年12月
5) C・C・マーカス　W・サーキシアン，「人間のための住環境デザイン」，鹿島出版会，1989年，P 31
6) C・C・マーカス　K・フランシス，「人間のための屋外環境デザイン」，鹿島出版会，1993年
7) 山本努他，「現代農山村の社会分析」，学文社，1998年